

重点取組分野	平成30年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	<ul style="list-style-type: none"> ・問題を把握し、見通しをもって問題解決する授業過程を算数科中心に研究する。 ・児童の実態に沿った教材研究を行い、主体的に学習に取り組む事のできる授業づくりを行う。 ・児童が互いの思いや考えを伝え合う場面を設定し、意見を交換しながら学び合える授業づくりを行う。 ・4年生の算数の授業を中心にTTIによる指導を取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・算数を重点研究し、学年内で合同研究することにより、見通しをもって主体的に問題解決する授業過程を研究した。 ・わくわくフェスティバルなどの発表の場を設け、児童が互いの思いや考えを伝え合う機会を意識的に設けた。 ・4年生の算数に少人数指導を導入した。 	B
豊かな心	<ul style="list-style-type: none"> ・地域との連携を生かした体験学習や出前授業による学びを積極的に行う。 ・行事や学習活動に学年に応じた実行委員等を設け、自主性を育てる。また、自分たちで活動を創り上げる達成感を味わわせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に豊富にある材をいかし、総合的な学習の時間を中心に探究的な学習を積極的に取り入れた。児童、職員共に地域とのつながりを意識することができた。 ・行事では児童によるプロジェクト活動を推進することで、自主性を育み、達成感を味わうことができた。 	A
健やかな体	<ul style="list-style-type: none"> ・体力アップ週間等を設け、楽しく体を動かしながら自分に合った運動の仕方を知り、体力の向上を図ることができるようにする。 ・健やか会議や保健便りを通して保護者の理解を進め、保護者との協働を図る。 ・長津田育ちの野菜を積極的に給食に取り入れ、食材を身近に感じる事ができるようにする。 ・給食時間や食育タイム、給食便りを使って計画的に食についての指導をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体力アップ週間に関わらず、定期的に体を多く動かす機会を設けた。 ・6年生の体育大会の長縄跳びを皮切りに、下学年がそれぞれ高い目標をもって3分間長縄に取り組む環境をつくった。ただし、過当競争にならないようにも留意した。 ・年間を通して地場野菜を給食に取り入れることで、食材への興味関心や、野菜を積極的に喫食する意欲を高められた。 ・計画的に食育を進め、生涯にわたり自ら健康的な生活をおくる力を育んだ。 	A
特別支援教育	<ul style="list-style-type: none"> ・児童支援専任や特別支援コーディネーターを中心に、全教職員で情報を共有する場をもち、児童への適切な支援につなげる。 ・各学年に副担任を置く。副担任は児童が安心して学校生活を送ることができるように担任や学年と連携し、協働して児童を支援する。 ・関係諸機関との連携を密にし、児童・保護者が学校や関係機関に相談しやすい体制を構築する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員が全校の児童についての情報共有をする場をもてたことは有意義であった。 ・副担任制は学年により運用方法が異なったため多少の見直しは必要だが、安心して過ごせる学校作りには寄与できた。 ・関係機関との連携では、北部学校教育事務所のS SWが特に不登校児童の登校支援の面で力になってくれ、相談しやすい体制を作ることができた。 	A
地域連携	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年の学習に積極的・計画的に地域の材を取り入れ、まちなの一員としての意識を育てる。 ・給食に取り入れている長津田育ちの野菜や、提供していただく農家の方々との連携をさらに強めていく。 ・学校運営協議会の意見や助言を積極的に学校経営に取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「まち・ひと」連携交流計画に沿って、各学年の学習において地域の方々に大きくかかわって頂き、どの学年においても地域の材を生かした体験的な深い学習を行うことができた。 ・3年生が農家の方々との関わりを通して、長津田育ち野菜について知り、野菜作りに込める思いを学ぶことができた。 ・地元農家や農協と連携して給食に地場野菜を取り入れ、学習に生かし、感謝の気持ちやまちなへの愛着を育んだ。 ・中学校ブロックの学校や地域団体と連携して朝食コンクールを行い、入選作品レシピ集を作成・配布することでまちなの一員としての意識を高め、まちな活性化に寄与できた。 	A
伝統文化	<ul style="list-style-type: none"> ・和太鼓演奏やまちなのお囃子などを演奏する活動に取り組む、伝統文化を継承していく思いや力を育成する。 ・体験的な活動の中で、礼に始まり礼に終わる心を学び実践につなげる。 ・和太鼓による「息吹」の演奏を学ぶことで、次代につながる伝統文化の担い手としての意識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・和太鼓交流において、打鼓音さんから「息吹」の演目を学ぶだけでなく、伝統文化を継承していく心得として礼節や所作についても教わった。 ・体験的な学習のみにとどまらず、体験から「なぜ」「どうして」とさらに探究する姿勢をもち、6年生からの伝承やさらに次の四年生につなげていきたいという担い手としての意識を高めることができた。 	A
いじめへの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートやYPなどを年間複数回行い、児童一人一人の心に丁寧に向き合う。 ・児童支援専任を中心に、常に全教職員で児童を見守る体制を構築する。教職員間の協働を大切にしている。 ・保護者と教職員の連携を図り、共に子どもを育てていく環境を整える。家庭訪問や個人面談、そのほかの相談窓口を広げる。 ・日常の学習や出前授業を計画的に行い、いじめは絶対にいけないという意識を育てる。 ・スキルアップ研修や校内研修を通して、教職員の細やかな対応力を向上させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートやYPを定期的(2ヶ月に1度)に取ることで、児童の心の声に耳を傾けることができた。また、その結果をデータとして残すことで、児童の今までの様子を継続的に確認することができている。 ・全教職員で児童の情報を共有することで、全児童を見守る体制を構築できた。教職員間の情報共有は上手いきき、協働を大切にできた。 ・保護者と教職員の連携を図り、共に子どもを 	A
人材育成・組織運営	<ul style="list-style-type: none"> ・学年主任を中心に学年研究会の内容を精選し、様々なキャリアステージに応じた教師力の向上を目指す。 ・メンターチームの活動はメンターリーダーを中心に自主的に運営する。内容はリーダーシップ研修や人材育成研修を積んでいる教職員に相談しながら考え、全教職員で支援する体制を作る。 ・教職員の職種の特性や学校運営協議会等、広い視点を組織運営に生かす。 ・学校評価内部アンケートを活用し、教職員一人ひとりが学校運営への参画意識を持つことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員一人一人の力が発揮でき、組織的に学校運営が行えるように、今年度、組織編成を見直した。 ・メンターチームが中心となって、校内研修の計画を立て自主的に運営した。様々な年代の教員が講師を務め、専門的な知識を伝えるとともに、講師自身のよい学びの機会となった。 ・学校運営の研修を行い、カリマネの大切さを学ぶことができた。 	B
ブロック内相互評価後の気付き	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研の回数の工夫は、自習時間の短縮や働き方改革にもつながるところがよい。ただし、授業公開をしない教諭の指導力向上も図る必要がある。 ・長縄大会などが過度の競争にならないような配慮をしているが、中学校では常に競争する場面も多い。そのため、中学校との接続を考える必要もある。 ・児童の情報交換の時間を設けるのは有意義だが、児童数が多いと情報交換だけでも長時間必要になる。今後、情報交換の方法や対象児童の絞り込みなど、考えていきたい。 		
学校関係者評価	<ul style="list-style-type: none"> ・キッズにくる子にも特別支援の配慮が必要な子が増えているが、学校がチームで取り組んでいるのがよく伝わる。その分、先生方の仕事が増えているように感じる。 ・学校評価アンケートの結果をみると、子どものほうがはつきり答えている。親は「はい」「いいえ」が少なく、はつきり態度を示さない親の姿勢が表れているのではないかと感じた。 ・感謝の会では、子どもと先生の距離感がとても近く感じた。これだけ子どものことを思っていると直 		
学校経営中期取組目標振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が安心して学校生活を送ることができるように、全職員で児童を育てるという意識を大切にしたい。また、学校だけでなく他機関との連携を大切にしながら、児童や保護者への対応力を高めた。 ・まちなとの連携や伝統文化への取組は、本校の特色として年ごとに充実しているが、新学習指導要領を踏まえて、教育課程の中での運用をさらに考えていく必要がある。また、地域の方との連携事業にも、持続可能なあり方を取り入れる必要がある。 ・OJTを中心に、メンターチームの取組の充実を図ることはできた。経験の浅い教員が増える中、メンターリーダーを中心にさらに自主的に企画運営ができるチームを作っていく。 		